

中西淳朗先生を悼む

荒井 保男

去る平成21年8月17日、中西淳朗先生が亡くなられた。

私は年老いて、世の無常を一入身に沁みて感ずるひとりであるが、中西先生の訃報に接し、無常感とともに、「惜しい人を失った」という感慨が心の底からこみあがってくるのをどうすることもできなかった。

その日は蝉のしきりに鳴く暑い日であった。

「君逝くや、諸行無常と蝉の声」

先生は学成り業終えて昭和40年10月横浜鶴見の地に開業された。場所は鶴見駅の東口で、私は内科を（鶴見駅の）西口に開いていたから、皮膚科の患者を先生に紹介して、御返事を戴くという間柄に過ぎなかった。それが先生と深い交遊関係をもつようになったのは、日本医史学会のもつ奇縁に依るものでした。

私は請われて、たまたま母校の創立史を編んだことがある。その時、横浜十全医院を舞台に活躍した外国人お雇い医師D.B. シモンズ存在を知り、以来、興味を惹かれ、私なりにポツポツと資料を集めて調べていたところ、それが杉田暉道先生の目にとまり、第95回日本医史学会総会（平成6年5月14日施行）の特別講演でお話するよう依頼された。この時、一緒に「横浜軍陣病院の再検討」と題して特別講演を依頼されたのが中西先生でした。席上先生のお話をうかがうと、研究分野が私のそれと重なり話はずみ、以来親しい交際を頂くようになったのでした。

先生の研究態度は文献を鵜呑みにせず、足で調査し目で確かめるといふきびしいもので、その事実の一つ一つを組みあげて全体像を明にするという徹底したものでした。ほんの一例であるが、二説



中西淳朗先生

あった横浜軍陣病院の所在地を確定され、軍陣病院を伝語伝習所と太田陣屋の関係、軍陣病院と大円寺との関係などを明らかにされたのも、この先生の真摯な態度によるものでした。

先生はその頃（平成9年より）神奈川県保険医協会の理事長の要職にあり、一貫して日本の保険医運動を牽引され、同会組織の礎を築くため、多大の努力を払われていた時でしたからこの上ない多忙の毎日でした。

その中で勉強され、あれだけの業績を残されたのである。驚くべきことで、私はそのエネルギーは何処よりくるものかと、いつも感心させられたものでした。

先生の研究は多方面にわたるが、ライフワーク

とも言うべきものに梅毒史の研究がある。なかでも「日本の梅毒の治療史」は高く評価されるべきであろう。先生は皮膚科医であったから当然のように梅毒史に興味を持たれたのであろうが、「日本梅毒治療史」は先生の独断場の観があった。

水銀療法の副作用の予防薬として江馬蘭齋の愛用した蜀葵根の薬効について、トルコの西境エディルネまで行って確かめたという話がある。

先生らしいエピソードである。

本年9月20日に発行された日本医史学雑誌に東京検梅史の補遺として『共慣義塾の研究』が掲載されている。これが先生の絶筆となった。

私が質問すると(つまらぬことでも)大きく目を開いて親切に説明して下さった。その先生は今ではもう居ない。

ただ先生の御冥福を祈るばかりである。

中西先生、安らかにやすみ下さい。

合掌